



ブラジル日系社会における混成日本語「コロニア語」の意味

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山東, 功 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011067

ブラジル日系社会における混成日本語「コロニア語」の意味

山東 功

一 はじめに

ブラジル日系社会の日本語の実態については、工藤（二〇〇四）の談話収録調査で示されているデータからもうかがえるように、さまざまな点から検討すべき多くの特徴を有している。日系一世の会話を例にしてみると、以下のように日本の外来語には見られないポルトガル語由来語彙が、多く用いられていることがわかつている。

うん、そう そう／プレージオ（アパート）に住んで（＋いる）。今ねー もう、シユラスカリア（シユラスコヘバ―ベキユー）専門店）があるから もう嫁さんも、ね「↑」／もう／、家では コジンニヤ（料理）しない、みんな あそこで 食べるって。 そう せんとね、家でできないから／ねー／。 みんなで シユラスカリア、

アジューダ（手伝う）する。¹

（四一七頁）

ここでの「プレージオ、シユラスカリア、コジンニヤ、アジューダ」といった語は、ポルトガル語からの語彙借用である。これに対し、次に挙げる日系三世の会話では語彙借用のレベルを超えて、ポルトガル語との混用という段階を示している。

おじいちゃん、お父さんの お父さんはね、「↑」、あのー早く 亡くなったよね「↑」。Acho que（私は、思う）ele（彼）が、3歳ぐらいーだったかな。Meu avô（私のおじいさん）、／お父さん／…。（四四六頁）

この引用では定型表現（「私は思う」など）に似た使用しか表れていないが、実際にポルトガル語の混用は他の多くの会話で見られる。それゆえに、厳密に分析すれば言語上に見られる両者の特徴は大きく異なっていると見えるのだが、ブラジル日系社会内においてはこれらを総称し、いわゆる「コロニア語」

という言語として、標準語的な「日本語」とは別のものと認識されている。ここで「コロンニア語」はどのような日本語であるのかという検討が必要となってくるが、ブラジル日系社会での「コロンニア語」がどのような意味をもっているのかという、言語意識上の意味を看過することはできない。とりわけ移民社会のアイデンティティと深く関与する言語の問題は、どういった言語とアイデンティティとが結びつくのかという点を精査しない限り、極めて観念的な議論に終始してしまう恐れが生じる。

本稿は、こうしたブラジル日系社会における「コロンニア語」について、主として一九五〇年代以降にそれらを析出した日系移民社会知識人達の言説を分析することで、日本語と移民社会のアイデンティティとの関係が示す意味とはどのようなものなのかを検討しようとするものである。また、本稿でいう「コロンニア語」については、工藤(二〇〇四)で示されたデータをもとにして仮に混成日本語として扱っているが、そこでも言及されているように、具体的な定義については言語学的にも今後の詳細な検討を要するものである点を断っておきたい。このことから、本稿は「コロンニア語」に関する実体論の前提となる「発見と認識」という移民思想的素描を本旨としている。

なお本稿をなすにあたっての展望については森(二〇〇四)

に負うところが大きい。本論文はブラジル日系社会日本語論に関する嚆矢的存在であり、極めて有益なものであることを最初に指摘しておきたい。

二 戦後ブラジル日系移民社会と日本語

ブラジル日系社会における日本語については拙稿(二〇〇三)で示したように、コロンニアと称される移民社会のアイデンティティと不可分な関係にある。戦前ではブラジル国内で独自の社会を形成し、日本国内での国語教育とほぼ同一の日本語教育が行われていたことは、日系社会での日本語のもつ意味がいかに重要であったかということを示している。また、ブラジル永住化への道を選択した戦後の日系社会で日本語は、日系人としてのアイデンティティを強固にするものとして機能した。正確には、強固にすべきであるという主張と、強固でありたいとする意識によって構成されていたといえるだろう。ただここで生起する問題は、現実において日本国内での日本語とは異なる日系社会内の日本語をどのように考え、どのように扱うべきか、ということである。この点については森(二〇〇四)で指摘されているように、一九五〇年代半ばから「ブラジルの日本人」としてのアイデンティティ析出が日系知識人層の間でなされて

いき、それが普及していったという経緯が背景に存在する。例えば「コロニア人」といった規定が日系雑誌の中で見られるのも、まさしく一九五〇年代後半のことであった。これらの思潮を形成したのが拙稿（二〇〇五）で言及したアンドウ・ゼンパチや、後述する佐藤常蔵、半田知雄であり、彼らの「コロニア語」論の移民思想史意義は極めて大きいものといえよう。

ただ「コロニア語」に対し、その具体的な分析や普及という面については、多くの問題が残されていた。すなわち、どのように扱うべきか、という点が問題となるのである。こういった問題を明らかにする資料の一つに伯国日語学校連合会編（一九六六）があり、そこには一九五〇年代からの日本語教育に関する重要論文の要約として以下の九編が掲載されている。

在外国語読本考

岡崎 親

学童と流行歌

岡崎 親

ニッポン語教育の理念

アンドウ・ゼンパチ

日語教育の必要性和その目標

永田泰三

ブラジルの教育を観る

後藤豊治

かいま見たコロニアの家庭教育

吉留 要

日語教育について

大沼 薫

情操教育の重要性

サンパウロ新聞社説

日語教育は家庭から

パウリスタ新聞社説

これらは、教育視察でブラジルを訪れた後藤豊治国学院大学教授の論考を除いて、日系社会の中で主張された日本語・日本語教育・教育観が如実に反映しているものといえる。日本語教育の目的について永田泰三論文では「①家庭内の意思の疎通を図ること。②日伯児童文化の交流と調和を意図すること。③日本文化探求の素地を作ること。④情操を陶冶し、精神を向上させること。⑤日本人本来の長所である勤勉、誠実、正直等の点を伸ばしてやること。」（六五頁、パウリスタ新聞初出（一九六〇）を要約したもの）とまとめられている。こうした情操教育重視の日本語教育観は、程度差はあるもののほとんどの論文で主張されているのである。岡崎親「学童と流行歌」では「真実な意味における学童愛護運動を起して、混乱しているコロニア社会の欠陥を是正し、前途有為の学童たちの進むべき道をはっきりと示して貰いたいと切願する。」（五七頁、「やまと民報」（一九五七）所載文）として、唱歌・童謡教育の重視が謳われている。つまり、日本語教育が社会改良運動にも似た機能を期待されていたと言える。これは戦前と戦後とで大いに異なることとなった移民社会での、変容に伴うコミュニケーション問題が前面化してきたことと関係しており、そこには日系人として

のアイデンティティのゆらぎを、どのように立て直すかという、一種の叫びと見ることもできるだろう。

ここで注意しておくべきことは、精神性という観点からはおのずと「正しい日本語」の重視が導き出せるのに対し、コミュニケーションという観点からは日系移民にとって「なじみのある日本語」を重視せざるを得ないという点である。これは日本語観の上で大きな矛盾を抱えたことを意味する。例えば日系社会では senior (セニョール) の直訳として「オジサン」が用いられることがあるが、これなどは「正しい日本語」という観点からは逸脱してしまう。実際、ブラジルにおける最初の日本語教育専門家としてサンパウロ大学に赴任した野元菊雄氏は「ブラジルの日本語は非常に乱暴だとの印象は拭えない。敬語的精神基盤のないところに育った日本語だからだ。」(野元(一九六九))と評している。しかし、このような表現は逆に日系社会の言語生活に極めて合致したものだからこそ存在すると積極的に評価することもできるのである。こうした点への解決法について「日本語教育は家庭から」(サンパウロ新聞社説)では「殊にコロナにおいての情操教育には日本語による方法が大切である。それは、これによって家庭と結ばれるという重要性があるからである。」(七一頁)と述べられている。これは日本

語と精神性との関係を家庭教育のロジックに置き換え、家庭内コミュニケーションの問題として考えようとする立場を示している。つまり「正しい日本語」以上に「正しい家庭教育」といった意義が強調されることで、日本語の内実の転換を図ろうとしたと考えられるのである。実際、ポルトガル語混用における語彙借用については、比較的寛容であることなどからもうかがうことができる。例えば伯国日本語学校連合会編(一九六六)所収の「日学連創立十周年記念事業『B』」による童謡レコード「山羊の車」(高田正巳作詞・宮浦哲夫作曲・小野寺七郎編曲)には、以下の歌詞が掲載されている。

- 一 ジョセの車がでかけます
五ひきの山羊が引っぱって
ギーギーギーコ音たてて
バストの中へレンニヤとり
- 二 ジョセの車を引くやぎの
すずをつけたはマンシンニヨ
せんとう行くのがポニチンニヨ
道草くいくい通ります
- 三 ジョセの車がかえります
レンニヤの上にイッペーの

花をかざって口ぶえを

ふけばチジユウのむれがとぶ

(七二頁)

日系社会では極めて日常感あふれる風景であるにしても、日本においてはまず理解不能な語が多数用いられている。こうした表現はアイデンティティの文学的発露といえる「コロニア文学」の形成において重要な要素となっている。すなわち、ポルトガル語からの語彙借用という、日本における外来語とは異なる「外来語」を意図的に用いることが効果的になされているのである。それは日系社会にとっては当然のことであり、バスの代わりにオニブスが用いられ、トマトはトマテと表現されるほうが実態を示していると認識されたからに他ならない。

以上の「コロニア語」析出の背景から、実際に「コロニア語」がどのように捉えられていたのかについて、日系移民社会の代表的知識人の言説から検討を試みることにしたい。具体的には佐藤常蔵（一九〇七―一九九七、移民史家）、半田知雄（一九〇六―一九九六、画家・移民史家）の「コロニア語」論を対象とする。

三 佐藤常蔵の「コロニア語」論

佐藤常蔵は日本力行会員として一九二二（大正一一）年に渡

ブラジル日系社会における混成日本語「コロニア語」の意味

伯、雑誌「農業のブラジル」社主幹として活躍し、経営のかたわら精力的に文筆活動も行い多くの著述を残した移民史家である。佐藤は「ブラジルの風味」（一九五七）の「コロニア語の解剖」の中で「奇怪な言葉」の実例として「ターちゃんファイカ・ケットしてコメしないとママイはノン・ゴスタですよ。」といった会話を引用しながら、次のような感想を述べている。

かくも日常会話が乱雑だが、過去の生活環境を通して出来上つたコロニア語が一つの型をなして殆んど家庭に滲みこんでいることを悟るのである。ところがこの乱れたコロニア語の中にコロニア自体の歴史と姿が反映しているかのように何かしら親しみがある。

従つて若し急にコロニアの各家庭で整然とした日本語が話されるならば美しい冷蔵庫を眺める感じになるかもしれない。しかし言葉の乱れにも自ら限度がある。言葉そのものが乱雑である上に、おかしな訛音で話されてはたまらない。

オニブスの中などで数人の日本人が大声で話し合うのは聞くに耐えないことがある。

(八一―八二頁)

自然とオニブスといった語が使われているように、ブラジルでの日本語は入植地「コロニア」を十全に反映した生活相その

ものであるという思いが、随想的に語られていることがうかがえよう。ただ、「ついでにアジノモトばウン・ラッタ買わにやならん、今なら二百ミルもするべね。」といった方言色の強い会話に対しては、「このまゝではコロニアの日本語は衰亡する。」(八二頁) というように強い危機感を表明している。佐藤はこの点に関してイギリス上層社会について言及しながら、コロニア語を上品に話せないものと提起し、次のようにまとめている。

悲壮な気持で日本語を習い、又偏狭な日本精神などを結びつけることなく、悠々迫らぬ態度で日本語を研究し、せめて美しいコロニア語を後世に残したいものである。

この見地からも歯切れのよい日本語を話す新移民から受ける影響は大きい。(八三頁)

佐藤の随想において注目すべき点は二つある。一つは、生活相と密接なつながりを持つコロニア語の上品さが生活のエレガントから喚起されるものであるとする認識である。佐藤は「智識人の集まった場所で奇智はおろかおどおどして碌にモノも云えない日本人を見る時つくづく一世移民の悲哀さを感じる。」(八三頁)とも述べている。もう一つは、新移民の影響とコロニア語とを関係付けながら言及している点である。新移民とは

戦後移民のことであり、戦前移民と意識の上でも多くの異なりをみせていたことは、アンドウ(一九六七)をはじめ多くのところで指摘されている。そしてこれらの二点は一九五〇年代のブラジル日系社会そのものを映し出しているのである。佐藤が一世の悲哀として象徴的に示した事例は、一般的な都市・農村の対立構造における農村生活のカリカチュアともいえる。上田(一九八二)において「ブラジルの日系社会は、いままでの一世Ⅱ農民というパターンから、2、3世・戦後移民移住者・商社駐在員Ⅱ都市という複雑な形へとさまがわりしてきているのである。」(一四頁)と指摘されている状況の端緒期に佐藤の発言を重ね合わせると、コロニア語が担った役割の一端が垣間見られよう。それはブラジル日系人の文化的生活相を反映するコロニア語なのである。これは森(二〇〇四)においても指摘されているように「コロニア文学」とも不可分なものであり、コロニア語と共振する文化的価値としての「コロニア文学」が創られなければならない状況を表している。

ところで、佐藤のコロニア語に対する言及と同時期に積極的に発言していた人物として、アンドウ・ゼンパチが挙げられる。アンドウの日本語論については拙稿(二〇〇五)で教育問題を中心に言及しているが、アンドウのコロニア語論については文

化的生活相に限定せず、逆に日本に対して誇れるものすら存在するとして積極的に評価している点に特徴がある。例えば、敬語などが整理されていることで民主的な日本語の姿が反映されているといった評価である。アンドウの主張については検討すべきところが多く存在するため本稿ではこれ以上ふれないが、少なくともコロナ語を日系移民社会のエスニック・アイデンティティとして根幹に据えていたことがうかがえる。これはブラジル日系社会における日本語教科書編纂事業と密接に関係してくるテーマであり、稿を改めて論じる予定である。

次に、移民社会における日本語論に重要な足跡を残した半田知雄の「コロナ語」論について検討する。

四 半田知雄の「コロナ語」論

コロナ語に関して多くの発言を残した日系社会知識人の代表者は半田知雄である。半田は一九一七（大正六）年渡伯、一九三五年にサンパウロ美術学校を卒業し、後にサンパウロ美術研究会（聖美会）を結成し活躍した日系画家の草分け的存在である。またサンパウロ人文科学研究所理事として移民史研究に携わり、多くの業績を残した。

半田が「コロナ語」について積極的に論じた論文は「ブラ

ジルに於ける日本語の運命」（半田（一九五三））である。半田はブラジルの日本語がどうなっていくのか、という点について、次のように研究意義を訴えながらまとめている。

究極においてブラジル化することが移民一般の運命だとすれば、その過程において日本語がどのような経路をたどってブラジル化するか、即ち日本語がブラジル語に代わるかということの研究するのは、われわれのなすべき一つの任務ではなからうかと思う。そして、もしこうした研究が、本当に学者によって専心なされたとしたら、日本語の長所や短所も副産物としてはつきり研究されるのではなからうかと思う。（半田（一九五三））

ブラジル日系移民社会の日本語に対する国語学・言語学的研究が着手されたのは、拙稿（二〇〇三）で言及した通り実により一九七〇年代以降のことである。それまでの約二〇年間は全く看過され続けていたと言つてよい。半田の先見の明に驚かされるとともに、言語研究が果たすべき役割が真摯に問われている発言であろう。半田（一九五三）については、森（二〇〇四）の簡潔な要約を参考にすれば、階級や身分関係を表すコトバの省略といった、移民社会の実相を直截に反映した言語への変容という予想が中心となっている。そこではブラジル語（ポルトガ

ル語)への傾斜が進む一方で、ブラジル語も日本語化するといふ点についても言及しており、今日の「コロニア語」をほぼ正確に示している。こうした現状分析は半田(一九六六)でも述べられている。ただ、どのようにあるべきかという問題をあえて避けている傾向が見受けられ、日本語教育のあり方についてはそれほど積極的に提言されていない。

日本語教育問題に関して半田は後年、半田(一九八〇)でより具体的な言及を行っている。先のものより三〇年近く経過した中で、半田は二世以降の日本語問題について、外国語教育としての観点の重要性を以下のように強く主張している。

二、三世が、ブラジル人であるということの認識は欠くべからざるもので、彼らにとって、ポルトガル語こそ母国語であることを第一にみとめなければならぬのである。

(中略) 即ち、ブラジルにおける二、三世への日本語教授は、日系一世からみれば、ブラジル人である子弟にとつては外国語である日本語を教えるのだということをやすくはならない。くりかえして言えば、外国語としての日本語を教えるわけである。

半田(一九八〇)

こうした外国語としての日本語教育観は、現在のブラジルでは中心の見解ではあるものの、日本語教育の実際については、

例えば「むしろ、骨組みだけの、最も機械的な日本語とはどんなものか、これに敬語や女性語や階級別、身分別につかう言語はあとから肉づけしておぼえられるような、何か特別な方法はないものか。」(半田(一九八〇))と述べている。これは野元・川又・義本(一九九一)における「簡約日本語」の発想に近いが、半田の場合、それは「愛する日本文化の特長的なものを、なんとかして二世やブラジル人一般に伝えたいと、今でも思いつづけている」(半田(一九八〇))という熱意からなされたものである。ここでいう「日本文化の特長的なもの」は半田の著述からすれば移民のライフヒストリーそのものであり、日系移民社会の文化ということになる。結局のところ、日本の日本語とは異なる日本語「コロニア語」への着眼が何のためであったのかを検証することで、半田の意図が浮かび上がってくることになるだろう。

五 移民社会と「コロニア語」

— おわりにかえて —

以上、一九五〇年代以降に出現した「コロニア語」をめぐる言説について主要なものを概観した。これらからうかがえることは、日系移民社会のアイデンティティを表象する日本語を、

標準語的日本語とは異なった「コロニア語」という混成日本語と定置することで、今後の移民社会のあり方を模索していかうとするものであった。しかしながら、家庭教育のロジックの中で継承されていく日本語である性質上、二世以降のブラジル同化が劇的に進んだ移民社会の変容とともに、今日では「コロニア語」の比重が極めて軽くなっていった。その上、外国語としての「日本語」教育が進んでいくことにより「コロニア語」への乖離が意識的にも顕著となったのである。例えば、ブラジル日系新聞を分析した白水（二〇〇四）でも「日系社会といえどもポルトガル語使用者（二世以降）はそのメンタリティはブラジル人そのものである人が多い。」（三五五頁）と指摘されているように、現在では日系社会のアイデンティティをそのまま日本語が代表しているわけではない。冒頭で引用した日系社会の会話についても、一方で明確に「正しさ」を意識した日本語が存在し、その使い分けがなされている。それはあたかも日本国内における方言と標準語との差である。日本における方言尊重の動きは、それが日本という枠において成立することがすでに自明な、いわば安全性が担保されたうえで形成されている思潮である。それに対し日系社会の日本語の場合は、標準語という「正しい日本語」という意識と、外国語として日本語を学習す

る日系人の増加という背景の中で、いわばブラジルの方言にも似た形で「コロニア語」が存在するわけである。これはエスニック・アイデンティティとしての日本語の内実が、日本文化継承語なのか、移民文化継承語なのかという根本的な差異を抱えたまま存在するということである。^③一般的に、ブラジル日系社会の日本語教育を問題にする場合、継承語か外国語かという問題設定がなされることが多いが、それは適切ではないように思われる。正確には、日系移民社会において、日本国内とほぼ同一の日本文化を中心とした継承であるのか、ブラジルにおける日系移民の日本文化を中心においた継承であるのか、という構図になるはずである。日系社会の現状からすれば、前者の日本語が外国語として「日本語」であり、後者が混成日本語「コロニア語」ということになるだろう。このように規定すれば「コロニア語」とは日系移民社会のエスノグラフィそのものであり、むしろその着眼意義は大きいように思われる。しかも現在では二世以降においても、デカセギ経験などにより、先に概観した「コロニア語」論のものとは異なる、新たな「コロニア語」が形成されている。これらも日系移民社会の日本語として決して看過すべきではない。つまり混成日本語「コロニア語」を通じて、日本国内以外での「日本」というあり方が、ほぼ十

全に示しうることができるということを、実は冒頭の会話は物語っているのである。

最後に、本稿は拙稿(二〇〇五)とともに、ブラジル日系移民社会日本語論の一部をなすものであるが、断片的にしか論じることができなかった。日系社会における日本語教科書編纂事業の教育史的位置とその意味について、またブラジル日系移民文学としての「コロニア文学」論については、それぞれ別途論及する予定である。それら全体を含めて、日本における「日本語」とは対照的であることを比喻する「対蹠地の日本語」という視角を提示することを企図している。

注

- (1) 文字化表記法については工藤(二〇〇四)を参照。ただし引用に際して会話の一部分を省略している。
- (2) この点について森(二〇〇四)では「ムダンサ」(Mudanga: 引越し、移転)という語を使用する日系人の心性について言及している。
- (3) このことを象徴的に示しているものとして、ブラジル日系移民史料館(サンパウロ市)での史料展示に、平安朝女房装束といった明らかに移民社会とは関係のない日本文化のディスプレイが含まれていたことが挙げられる。(二〇〇三年当時)

- 参考文献(先行研究全般については拙稿(二〇〇三)を参照)
- アンドウ・ゼンバチ 一九六七 「日本移民の社会史的研究」 「サンパウロ人文科学研究所 研究レポート」II
- 上田篤他編 一九八二 「ブラジル南部外国人移住地域における住文化変容に関する比較調査」(昭和55年文部省科学研究費補助金海外学術調査報告書) 大阪大学工学部・サンパウロ大学芸術・コミュニケーション学部
- 工藤真由美 二〇〇四 「ブラジル日系社会言語調査報告」 「大阪大学大学院文学研究科紀要」 四四・二
- 佐藤常蔵 一九五七 「ブラジルの風味」 日本出版貿易株式会社
- 山東 功 二〇〇三 「ブラジル日系人の日本語への視点」 「女子大文学 国文篇」 五四
- 山東 功 二〇〇五 「1950年代のブラジル日系社会と日本語」 「阪大日本語研究」 一七
- 白水繁彦 二〇〇四 「エスニック・メディア研究 越境・多文化・アイデンティティ」 明石書店
- 中隅哲郎 一九九八 「日本語教育の流れを考える」 「人文研」(サンパウロ人文科学研究所) 一
- 野元菊雄 一九六九 「ブラジル便り ブラジルの日本語」 『言語生活』 二一四
- 野元菊雄・川又瑠璃子・義本真帆 一九九一 「簡約日本語の創成」 『日本語学』 一〇・四
- 伯国日語学校連合会編 一九六六 「幾山河(全伯日語教育史)」 伯国日語学校連合会
- 半田知雄 一九五三 「ブラジルに於ける日本語の運命」 『時代』 一五
- 半田知雄 一九六六 「今なお旅路にあり」 太陽堂書店

半田知雄 一九八〇 「ブラジル日系社会における日本語の問題 (二)

(二) (完) 「言語生活」三三六―三四八

前山 隆 二〇〇一 「異文化接触とアイデンティティ」御茶の水書

房

森 孝一 二〇〇四 「ブラジル日系人の「日本語」を巡る状況と言

説」『大阪大学大学院文学研究科紀要』四四・二

付記

本稿は公立大学研修員制度に基づく調査研究「在外移民社会における言語に関する総合的研究」及び科学研究費補助金萌芽研究(研究代表者・工藤真由美)による研究成果の一部である。

(さんとう いさお・本学専任講師)